

## 震災・学校支援チーム(EARTH)員の活動から見てきたもの —HYOGOの防災教育の役割—

三木市立緑が丘小学校  
主幹教諭 山口 正明

### 1 取組の内容・方法

#### (1) はじめに

平成7年の1月17日から24年が経った。震災当時、淡路の小学校で勤務していた私は、その日の朝、何をしていたのかもわからず、つぶれた家々を見ながらとりあえず学校へと急いだことを覚えている。震災当時の私は本当に何をすることもできなかった。平成12年、兵庫県は、震災から学んだことを活かし、他府県からの支援・協力へ応えるために、被災地の教育復興を支援する「震災・学校支援チーム(EARTH)」を組織した。そのチームに声をかけて頂いた私は、今の自分に何ができるかを考えて防災学習のことを学び、アース員として活動することになった。震災で私たちはたくさんの大切なものを失った。しかし、そこからたくさんの大切なことも学んだ。日頃からの防災意識の向上、人とのつながりや助け合い、それらを確認して24年間を歩んできた。人には、学んだことを次の世代へ伝え、残す役目がある。震災のことを知らない子ども達に、阪神・淡路大震災のこと、防災の知識や避難方法、命の重み、思いやりの心、震災から私たちが学んだ全てのことを伝え続けなければならない。「地震は怖い」ということだけで終わらせてはいけない。自分の体や命を守る方法を学習し、命ある今を一生懸命生きるということを学び考えさせたい。そのような思いでこれまで防災教育の推進に取り組んできた。

#### (2) 震災・学校支援チーム(EARTH)員派遣活動

##### ア トルコ共和国「防災教育プロジェクト」派遣 (平成23年)

私は「トルコ国防災教育マスター教員研修プロジェクト」の研修会にアース員として派遣された。マスター教員研修プロジェクトとは、JICAとトルコの国民教育省教員研修局が協力して行っている防災教育推進教員を育成する研修プログラムである。兵庫県の防災教育の推進について講義し、研修に協力した。

研修オープニングでの講義は、トルコ国の教員260名を対象に行った。講義の内容は、模型を使った災害メカニズムの教示事例の紹介と牛乳パックを使った建物の模型作りと補強方法の試行である。研修中は、講義中に会場から質問が多数あった。分からないことや言いたいことがあったら、その都度議論し、解決していきながら研修が進んだ。また、「HYOGOの防災教育について」の講義では、阪神・淡路大震災を経験した兵庫県における防災教育の取組について説明を行った。「自分の命は自分で守る子ども」を育てるため、継続的な防災教育の重要性、持続的な内容更新の必要性を伝えた。日本の小学校の教育課程を基に、防災教育に関連付けられる授業内容を抽出する流れについて、実例を示して話をした。そして、各教科における防災の視点を演習形式で教示した。トルコの先生方は、非常に熱心にワークショップを行い、学校防災体制について検討されていた。討議後、ワークショップで制作したそれぞれの学校防災体制について、各



講義の様子



グループの代表の先生に全体会場で発表して頂いたが、その時にも、会場から発表についての多くの質問や指摘があり、互いに学習を深められていたのが印象的だった。

#### イ トルコ共和国「防災教育プロジェクト」派遣（平成 26 年）

2 度目の派遣では、STEP 研修（防災教育普及研修システム）におけるプレゼンテーションを行った。トルコ国には、トレーニングを受けた学校教員が講師となり、他の教員を指導するフォーマッター制度がある。この制度を参考に 81 県すべての学校で、授業や学校活動における防災教育の実践と、効果的な普及・展開を念頭においた STEP 研修のコンセプトが開発された。STEP 研修を全国で実施することにより、トルコ国に防災教育が迅速に、効果的に普及していくことが期待されている。STEP3 研修に参加し、兵庫の防災教育のとりくみを「学校現場での授業実践」に特化して伝えた。授業実践の工夫や震災セレモニーの実践について紹介した。十分役に立てたかはわからないが、私自身は大変意義深いものを感じた。3 年前のトルコ国での防災教育プロジェクトのスタート時に関わらせて頂き、今回はその結果を学校現場で視察できたからである。トルコ国でもしっかりと防災教育が前進していることを感じた。先生方の熱意とモチベーションを今後どの程度継続できるかという「教育システム」「行政システム」を現場の意見を取り入れながら作っていきけるかが鍵だと思う。子どもたちの実態は日本もトルコも変わらない。防災について教えれば教えるほど子どもたちの力は伸びていく。子どもたちが主体的に災害について備え、ともに苦境を乗り越えるための知恵とやさしさを身につけていけるように育ててほしいと思った。



トルコでの防災授業の様子

#### ウ 平成 30 年 7 月豪雨災害岡山支援派遣

豪雨被害のため、避難所となっていた倉敷市立園小学校と倉敷市立岡田小学校において支援活動を行った。子どもたちの学習支援を行ったり、担任の先生の家庭訪問に帯同したりした。また、学校再開に向けて、教室の復帰作業や運動場周囲の環境整備を行った。

#### (3) 防災教育研修会における講師派遣の取組

- ・平成 23 年度北播磨地区第 2 回防災教育研修会
- ・平成 23 年度第 2 回三木市学校防災連絡会議
- ・平成 24 年度北播磨地区第 2 回防災教育研修会
- ・平成 25 年度防災教育推進指導員養成講座〔初級編〕
- ・西宮香風高校講演（平成 27 年）
- ・震災 20 年防災教育フォーラムパネラー参加

#### (4) 防災教育副読本「明日に生きる」作成部会委員としての取組

防災教育副読本「明日に生きる」作成部会委員としてその作成に関わらせて頂いた。担当したのは、小学校用副読本の公助・共助のページ作成である。大切にしたい視点として、防災をトータルな生活の一環として捉えることや地域の人々との交流を広げることがを学べるように考え、副読本の作成に当たった。副読本の完成後は、積極的に「明日

に生きる」を活用し、研修等を通して他の教科との関連性や活用例を教員に広める努力をした。

(5) 「1・17を忘れない集会」での講話

系統的に「防災学習」を進めていくことが大事だが、「語り継ぎ」の観点からも「1・17」前後の防災学習は、特に大切にしていきたい。本校では、毎年全校生で「1・17を忘れない集会」を行っている。ある児童の呼びかけで、「1・17を忘れない集会」を前に、学校敷地内の竹を切り出し、竹灯籠づくりが始まったことがあった。震災を忘れず、自分達にできることをしていきたいという思いで、灯籠作りの輪が広がっていったことをとてもうれしく思った。



1・17集会の様子

## 2 取組の成果

### (1) 震災・学校支援チーム(EARTH)員派遣活動

#### ア トルコ共和国「防災教育プロジェクト」派遣

講義を聞かれたトルコの NGO 組織の女性の方が、兵庫の防災教育の研修の進め方について以下のように感想を言われた。「推進計画や防災体制が図式化、形式化してあり、方向性が明確である。ワークショップなどの研修を行う前にそのような資料を使って、取り組む方向性を共通理解しておくことは、とても大切なことである。」細かくていねいな取組を継続的に行うことができることは、日本人の良さなのかもしれない。これまで兵庫の先生方が積み上げてきた防災教育は、長期的な取組である。しかも何度も成果をフィードバックし、課題を明確化し、一步一步進んできた。防災教育推進の取組を、構造化し、組織化し、具体化してきた。気の長い話だが、それは「震災を語り継ぐ」という私たちの思いや考え方にその方向性が表れているのだと思う。また、これまでも兵庫では、自分たちが積み上げてきた災害に対する備えを、他の都道府県にも発信してきた。1・17の教訓を東日本大震災でも様々な場面で活かすことができた。

今回のトルコ国の研修では、日本ではあまり考えていない防災教育の課題を教えられた。例えば、それはテロに対する安全教育・防災教育である。講義中に学校がテロ集団に襲われる映像を見せてもらった。日本では、不審者への対応はしているが、大方の想定では不審者は1名である。テロについて想定した十分な備えを学校現場ではしていないのではないかと不安に感じた。実際、過去には地下鉄で毒薬を無差別に散布する事件が起こった。不審なものに対してどのように対処すればいいのか子どもたちに教える必要はないのだろうかと考えさせられた。今後の防災教育を考える材料として、トルコの先生から率直な意見も頂いた。副読本「明日に生きる」は小さい子どもたちにはショックな部分もあるのではないかと。「いつも防災、防災と言っていると、子どもたちはうんざりしてしまわないか。」もっともな指摘であると思う。震災を知らない子どもたちに教えることはたくさんあるが、発達段階を考慮して系統立てて、防災教育を進めることはとても重要である。思いつきの防災教育では効果的な指導とは言えない。楽しく学ぶということも、防災教育の入り口としてとても大切な要素であると考えられる。

阪神・淡路大震災とコジリエ地震、東日本大震災とトルコ東部大地震。この研修プロジェクトを中心となり進めておられたトルコ国の教育省の方は、「日本とトルコは、運命を共にする国」と言われた。「あの時、救えた命があったのではないか。」この思いがこれからの両国の防災教育をさらに進めていくと思う。

## イ 平成 30 年 7 月豪雨災害岡山支援派遣

現地では、学校再開までの教室環境整備等の詳細な計画を共有できていない様子があったので、再開までのロードマップの情報共有が大切であるとお伝えした。また、教員から、学校再開後の心のケアの対応について質問があったので、保護者の話を受け止めるストレスへの対応や修学旅行等の宿泊行事に対する就学支援の必要性、被災の状況は様々だが大切なものがなくなったという喪失感はそれぞれが持っていること、サイレンの音などを聞いていた児童にもストレス反応が出ることがあること等の話をさせて頂いた。家庭訪問に帯同し、被災状況を確認すると、地域間でかなりの格差があることがわかった。今後の学校再開に向けて、児童や保護者をどのようにつないでいくかしっかり検討して進めていく必要性を感じた。学校再開時の当面のプログラムについては伝えきれなかったが、事務局を中心に順次派遣されるアース員が十分な情報共有に基づいて活動できる体制を整えて頂いていたので、ここでも震災の教訓を活かした兵庫県だからこそできる支援活動があることを強く感じた。

### (2) 防災教育研修会における講師派遣

防災教育研修会における講師派遣は、自分の防災教育の取組を振り返る絶好の機会となり、大いに自分自身の防災教育における指導力のスキルアップにつながった。

### (3) 防災教育副読本「明日に生きる」作成部会委員としての取組

兵庫県の防災教育の結集ともいえる防災学習副読本「明日に生きる」を大いに活用して防災学習を進めていきたいと思う。また、他の先生方とともに指導方法や指導内容を共有してきたいと思う。副読本「明日に生きる」は、学年の実態に応じて、災害と科学的知識等の学習課題に結び付けていくことができる兵庫ならではの学習教材である。

## 3 課題及び今後の取組の方向

震災・学校支援チーム(EARTH)員としての活動で、最も印象深いものはやはりトルコ国への派遣である。国を挙げての防災教育の研修プロジェクトに微力ながら関わらせて頂いた。この派遣は、今後の兵庫の防災教育の役割や方向性について考える機会にもなった。これまで兵庫県が積み上げてきた防災に対する取組や備えを他の都道府県に発信し、震災の教訓を様々な場面で活かすことができていると改めて感じる事ができた。

東日本大震災が起こった後、兵庫の防災教育も津波に対しては備えが不十分であり、「想定を超える災害」について準備が不十分であったことを認識した。東日本大震災での初動体制や避難方法、また、災害発生以前の備えや防災教育に対する評価や点検が進められてきた。現在、南海トラフでおこる大地震・津波について懸念され、その備えが進められているところである。

今後、「防災」という考え方と「減災」という考え方・定義を一度整理するの必要を感じる。トルコの防災教育プロジェクトで一緒にさせて頂いた JAIC 職員の方と研修終了後、情報交換をする機会があったが、「リスクコミュニケーションということで、限界を示すことも重要視されようとしている。これをうまく語り継げるかどうかは日本もポイントになるが、決して言い訳ではなく、このあたりをきちんと説明できる防災教育を進めたいという思いでいる。」と言われた。全く同感である。今後も兵庫県では防災教育専門推進員が中心となり、さらなる防災教育の実践を進めていき、アース員が中心となり HYOGO の防災教育を国内外に発信していくのだと思う。県内外を問わず、また防災教育に対して同じ思いを持っている他の国々とも、災害への備えや防災教育の取組を共有していければと考える。